

選者 川口孤舟

参加者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ

長谷見びん 星田啓子 山崎亜也

投句・選句 今井紀久男 熊谷くにお 小早健介 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか

中川雅夫 西澤國護 福島正明 古川百合子 古田昇 宮内規雄 山田けい子

山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 山本三恵

【互選句】 ○は選者の「天」 ◎は孤舟選者の選

十点 ◎睡蓮の浮き葉押し分け鯉の髭 びん (孤・く・健・千・○康・堂・昇・啓・亜・け)

九点 ◎日の落ちて瀬音高まる鮎の宿 康敏 (○そ・紀・孤・く・清・ゆ・國・び・亜)
腰に挿す団扇決まりて漢かな 亜也 (紀・忠・健・千・孝・康・堂・啓・○三)

七点 湧き水は地球の息吹花菖蒲 孤舟 (くす・く・○健・孝・昇・規・○盛)
目に眩し素足が歩む初夏の街 ただしげ (紀・龍・己・ゆ・國・び・盛)
解(ほど) けくる月下美人の白光す 啓子 (紀・と・千・孝・龍・清・け)

六点 口無しの花の匂ひを探す道 五郎太 (そ・紀・五・雅・國・正)
年寄りの細腰見せる半ズボン 全 (そ・紀・と・龍・堂・ゆ)
無住寺の苔むす句碑や額の花 康敏 (紀・く・健・た・び・昇)
◎時計草いつまで妻の立話 全 (くす・孤・く・堂・百・盛)

五点 ◎田に入れば賑やか蛙鳴く ただしげ (孤・千・雅・び・天)
◎つかの間の楽園に入る昼寝かな 盛雄 (孤・と・た・○孝・清)

四点 喪の家に猫出迎へる暑さかな 忠彦 (○くす・紀・と・け)
雨の日も老ひを慰む濃紫陽花 全 (た・己・ゆ・雅)
地下鉄を上げれば神田祭かな 孤舟 (○正・規・け・天)
◎潮の香の松風涼し安吾の碑 くに お (紀・孤・康・昇)
夕顔の白きを捧ぐ舞扇 五郎太 (紀・康・○己・啓)
年老いて葉桜愛でる男あり ゆたか (忠・百・規・亜)
松落葉老いを語りて庭を掃く 雅夫 (紀・己・百・三)
紫陽花や草むす駅の雨上がり 國護 (そ・紀・己・天)
灼け石の陣を取らんと池の亀 びん (紀・五・健・け)
夏夕焼け浄土は赤るや鳥の群 啓子 (紀・五・○龍・己)
艶やかな立葵かな女子バレー 盛雄 (紀・忠・隆・啓)

三点

羽抜鶏されど矜持を失はず
己が影水面走らせあめんぼう
苔玉に白き花ある夏至の夕
メロンパフエ昨日の憂ひ和らぎて
子らの支へ大いにあるよ亡夫（つま）にビール
朝刊よむ無音の部屋に風薫る
島々に朝日煌めく初夏の瀬戸
◎虫干や四隅を留めし写真帳
里帰り歩めば懐かし麦の秋
あじさいや健康長寿の同期会
山峡に雲霞と見しは藤の花
額紫陽花咲く早朝の通学路
浅草で年一会す泥鰯鍋
夏布団迷うほど有り今一人

孤舟

全 五郎太
とみ子
千恵
ただしげ
堂哉
ゆたか
健介
びん
正明
亜也
けい子
全
（〇と・清・天）
（康・び・三）
（清・正・亜）
（紀・び・三）
（國・百・隆）
（くす・そ・ゆ）
（孤・千・亜）
（紀・た・盛）
（紀・隆・正）
（堂・ゆ・孝）
（健・雅・規）
（紀・忠・正）
（た・啓・百）

二点

リハビリ仲間と鬘貞自慢の夏芝居
一皮も二皮も剥け蛇の衣
新種なり紙魚の逃げ足超速し
仁左玉（にざたま）の妖気あふる木下闇
雨に逢い自在に変わる紫陽花色
耕運機牛に代わって代を掻き
◎大銀杏結えず賜杯や五月場所

台湾に旅して

夏空や台湾料理文化あり
雨もよい臆せず揚がる遠花火
矢となりて烏帰巢す夏夕焼
◎月もなく風なき夜や螢舞ふ
形代に託す夏越の大祓
今朝もまた山鳩鳴くよ梅雨晴間
カフェオレのハートを混ぜて梅雨晴れ間
夏至落暉常と変らぬ暮しかな
玄関に合羽と帽子梅雨仕度
多量なる新繭静かに荷受けする

紀久男
孤舟
とみ子
千恵
ただしげ
堂哉
全
（正・盛）
（五・〇昇）
（紀・三）
（紀・け）
（忠・國）
（規・天）
（紀・孤）
（紀・忠）
（くす・孝）
（紀・千）
（孤・た）
（紀・隆）
（紀・び）
（清・堂）
（と・三）
（紀・規）
（紀・啓）

一点

到来の水茄子さかなにノンアル酒
都知事選女の闘い梅雨に入る
検査終へ葉桜見上げ薬待つ
さくらんぼ贈ってくれた友は亡く
雨上がりラベンダーの花匂ひ立つ
湖を前に関所の夕焼けて
◎青鷺の女学校からゴスペル歌
老鶯は衰え知らずなお美声

紀久男
忠彦
全
全
とみ子
千恵
全
（龍）
（昇）
（百）
（隆）
（そ）
（く）
（孤）
（盛）

目に眩し素足が歩む初夏の街

ただしげ

ゆたかさん・・・素足が歩むという表現に微妙な感じをうけます。

※句会中で・・・「素足」「初夏」で季重なりになっています。

解(ほど) けくる月下美人の白光す

啓子

とみ子さん・・・「白光す」が、月下美人の花の美しさをよく語っています。

千恵さん・・・解けるのフレーズがいいですね。短命な花の開花をよく表していると思います。

六点句

年寄りの細脛見せる半ズボン

五郎太

とみ子さん・・・年々暑くなってきました。半ズボンを自信を持ってはいてください。

堂哉さん・・・私はシンガポールに駐在してから帰国後も夏は半ズボンを愛用しています。

細脛はしかたがないので、せめて背筋はピンと伸ばして！

ゆたかさん・・・よく見かける情景です。微笑ましいです

無住寺の苔むす句碑や額の花

康敏

ただしげさん・・・荒れ果てた無住の寺、苔むした句碑、そこに咲いている華やかな感じの額、

その対比が面白い。

時計草いつまで妻の立話

康敏

孤舟選者・・・女性の立話は、時計草も驚くほど延々と続くものだ。

堂哉さん・・・季語が上手い！我が家でもしよっちゅうあります！

百合子さん・・・この時計草が目に入らぬか！立話は女性の楽しみの一つです、どうぞご勘弁を。

盛雄さん・・・上五の季語が楽しい一句に仕上げました。

五点句

田に水が入れば賑やか蛙鳴く

ただしげ

孤舟選者・・・代掻きが終わった田圃では、いつの間にか蛙の大合唱。

千恵さん・・・日本の原風景ってこんなだったんですね。

天牛さん・・・しばらく体感したことがなかったので、殊の外蛙の声が聞こえてくるようです。

※康敏さん・・・原因と結果です。原因と結果は理屈であって詩ではないとされます。

つかの間の楽園に入る昼寝かな

盛雄

孤舟選者・・・昼寝は日頃の憂さ忘れさせ、幸せの国へ誘ってくれる。

とみ子さん・・・お昼寝の寝入りばなの夢心地わかります。

ただしげさん・・・昼寝の気持ち良さを上手に表現している。

孝岳さん・・・午後のひと時の微睡みは、何とも言えない快樂をもたらせてくれる。つかの間な

んだけど「楽園」と表しているのが微妙に良い。

四点句

喪の家に猫出迎へる暑さかな

忠彦

とみ子さん・・・句の背後に、物語がある気がいたしました。

雨の日も老ひを慰む濃紫陽花

忠彦

ゆたかさん・・・庭先の風景でしょうか。雨の日という表現が微妙な響きを感じます。

※孤舟選者・・・「老ゆ」は上二段活用ですので、「老ひ」は「老い」となります。

地下鉄を上げれば神田祭かな

孤舟

天牛さん・・・静かな地下鉄の階段をあがると、人間のざわめきが急にせまってきたまますね。

※康敏さん・・・先行句があります。(地下鉄を上げれば神田祭かな 前野雅生)

潮の香の松風涼し安吾の碑

くにお

孤舟選者・・・新潟寄居浜の松林中、坂口安吾の碑「ふるさとは語ることなし」。
康敏さん・・・新潟の坂口安吾の生誕碑であろう。「私のふるさとの家は空と、海と、砂と、
松林であった。そして吹く風であり、風の音であった。」(石の思ひ)

夕顔の白きを捧ぐ舞扇

五郎太

康敏さん・・・舞扇に夕顔の白い花。「白露の光添へたる夕顔の花」源氏物語の薄命な夕顔が思
い出される。『光る君へ』の思い入れでしょうか。

正己さん・・・中七でその白さが目に迫って来る。

年老いて葉桜愛でる男あり

ゆたか

百合子さん・・・満開の桜には愛でる気持ちに儂さも漂いますが、葉桜にはこれからという未来があ
りそうな、これは老いて知る境涯でしょうか。

亜也さん・・・自然の移ろいそのものをいささかの諦念とともに受容し愛惜する姿。

松落葉老いを語りて庭を掃く

雅夫

百合子さん・・・松落葉が語り掛けてくるのか、作者が松落葉に語り掛けているのか、私も庭を
掃きながら会話します。

紫陽花や草むす駒の雨上がり

國護

天牛さん・・・無人駒でしょうね。ひときわ紫陽花だけが美しく咲き誇っていますね。

灼け石の陣を取らんと池の亀

びん

五郎太さん・・・亀は日焼けを恐れずに甲羅干しする様です。

夏夕焼け浄土は赤るや鳥の群

啓子

五郎太さん・・・夕焼けの先には西方浄土か。「赤る」茂吉に「あかあかと」という歌があります
ね。日本画を思わせます。

龍平さん・・・「春と修羅」の最終調和局面？ 結局いづれこの世の生涯におかれましてもそれは

巧くいった結果でしたヨって！ そーかなー？でも何となく救われる感じ。

艶やかな立葵かな女子バレー

盛雄

隆さん・・・確かに、バレー女子選手は立葵に似る。「バレー女子コートを狭く立葵」でも。

啓子さん・・・背の高い、顔の小さな美人選手が多くなりました。確かに「立葵」。季語の幹旋

が今どきで効いていると思えました。

三点句

羽抜鶏されど矜持を失はず

孤舟

五郎太さん・・・雄鶏か？フランスのシンボルでもあります。

康敏さん・・・老齢で羽抜鶏さながらだが、プライドだけは高い。御自身のこと？

己が影水面走らせあめんぼう

孤舟

とみ子さん・・・あめんぼうの動きが見える見事なお句と思います。

天牛さん・・・よく見えていますね。本当にそうですね。観察眼に感心しました。

苔玉に白き花ある夏至の夕

五郎太

康敏さん・・・夏至の頃咲いているのは白丁花だろうか。苔玉に白い花、いかにも涼しげだ。

メロンパフェ昨日の憂ひ和らぎて

とみ子

亜也さん・・・理知のソーダ水とは一味違う情意のパフェ。

子らの支へ大いにあるよ亡夫（つま）にビール とみ子

びんさん・・・下句が六音と破調ですが実によくこなしておられます。絹湊師の最晩年の作に「鳩寒し四五歩の距離を離れず二羽」の破調の句があります。中句の字余りは厳戒ですが、この下六の場合は亡夫への慕情も深く、見事な余韻を生んでい

ると思います。

千恵

朝刊よむ無音の部屋に風薫る

隆さん・・・孤独な時間でも友になる風がいる。

百合子さん・・・新聞をめくる音も聞こえそうな静謐な空間、風の薫りを感じるこの余裕・・・

島々に朝日煌めく初夏の瀬戸

ただしげ

ただしげ

虫干や四隅を留めし写真帳

堂哉

孤舟選者・・・セピア色に染まった昔の写真が貼られた古びた写真帳。

千恵さん・・・私もそうやって留めていました。懐かしいです。いまはもう廃番ですね。

亜也さん・・・そうそう、そういうのがありました。剥がれかけている隅もあつたりして…。

里帰り歩めば懐かし麦の秋

ゆたか

ただしげさん・・・久しぶりの初夏の帰省、懐かしさが良く理解できる。

盛雄さん・・・故郷しのぶ素朴な佳句。麦の秋で決まりました。

あじさいや健康長寿の同期会

健介

隆さん・・・夏に母は紫陽花柄のブラウスを着ていました

山峡に雲霞と見しは藤の花

びん

堂哉さん・・・兵庫県の奥や大阪の能勢の奥をドライブしますと、正にこの句の通りです。車窓

の右や左に見付けては楽しんでいきます。

ゆたかさん・・・水彩画のような趣があります

夏布団迷うほど有り今一人

けい子

ただしげさん・・・以前はみんなで使ってた夏蒲団も家族も少なくなり、その寂しさが、

下五で上手く表現されている。

百合子さん・・・家族の変遷が偲ばれる佳句と思えました。忙しかったけれど充実した日々でも

ありました。

二点句

一皮も二皮も剥け蛇の衣

孤舟

五郎太さん・・・巧みです。

昇さん・・・二皮もと念を押した措辞のユーモアに脱帽。成長の変化の大きさも見えて

きます。

耕運機牛に代わって代を掻き

ただしげ

天牛さん・・・急に会社で農業機械課だか部があつたことを思い出しました。時代はすっかり

変わりました！

大銀杏結えず賜杯や五月場所

堂哉

孤舟選者・・・昨今の横綱・大関の不甲斐なき。

月もなく風なき夜や螢舞ふ

啓子

孤舟さん・・・辺りが真つ暗で無風の状態で螢の乱舞する条件。

ただしげさん・・・螢の飛ぶ様子が目に浮かぶ。

形代に託す夏越の大祓

啓子

隆さん・・・田舎から連れてきた母は病気で逝った。生前、大宮八幡宮（杉並）で回復と一緒に祈った。

紀久男・・・季重なりがあるも、捨てがたい。

カフェオレのハートを混ぜて梅雨晴れ間 けい子

堂哉さん・・・誰かを待つ間かな？それとも連れと話ながらかな？中七が良いですね

多量なる新繭静かに荷受けする 天牛

啓子さん・・・絹を紡ぎ出す春蚕が作った繭が届いたのでしよう。大切に有難く受け取る。しんとした祈りの想いすら感じました。

一点句

到来の水茄子さかなにノンアル酒

紀久男

龍平さん・・・禁酒法の時代でもなくあらゆる美酒が溢れかえる今日この頃でござんすのに 昨今は sober curious な方が増加傾向にあるそうです。

検査終へ葉桜見上げ葉待つ

忠彦

百合子さん・・・葉桜を見上げながら、良き結果をもたらしてくれますように、と。

※康敏さん・・・三段切れです。しかも、動詞が三つもあります。一句一動詞を心掛けて。「葉桜や検査で葉一つ増え」では。

さくらんぼ贈ってくれた友は亡く

忠彦

隆さん・・・ウクライナ、バレスチナでも次々と人々は消えた。存在したのに存在しない人になつた。生命の誕生以来涙は尽きない。

青鳥の女学校からゴスペル歌

とみ子

孤舟選者・・・「鶯の絡まるチャペルで・・・」聖歌が聴こえてくる。

老鶯は衰え知らずなお美声

千恵

盛雄さん・・・友人でしようか、ご自身の事でしょうか。「なお美声」がいいですね。

手仕事の極みの刺子虹の橋

千恵

五郎太さん・・・アイヌのものか。しっかりと縫った衣装。外には雨上がりの虹がさしていたようです。

行け口となりし妻なり涼み川床

堂哉

五郎太さん・・・ほんのりとした色気がいいですね。美人なのでしよう。

校門をくぐり右手に藤の棚

國護

隆さん・・・予期せぬ感動でしょう。「校門をくぐり右手に藤の咲く」でも。

紫陽花や山の停車場雨の色

國護

天牛さん・・・自然はりっぱなもので、人間には全く関係なく美しい花を咲かすですね。

江ノ島の巖上草刈る長柄鎌

びん

亜也さん・・・ちよつと大袈裟なところの滑稽味がいい。「巖上」が効いている。

上着着る人絶え夏のコンサート

亜也

龍平さん・・・Heat Dome 時代に生きる我等。



【次回青葉会予定】

日時：令和六年七月二十五日(木) 13:00から 世田谷区三軒茶屋 新・しゃれなあと

《ご注意下さい！ しゃれなあと は近くですが移転しました。初めてのご参加者には、添付の地をお持ちいただき、お越しください。田園都市線三軒茶屋駅上って3分の立地です。不明な場合は遠慮せず、星田までご連絡下さい。TEL080-8870-8201》

当日ご出席者に於かれては、当季雑詠5句、ご投句のみの方々には2句を目処として 事前に当方(星田)までお送りください。当日の選句表を事前に作成致します。締切は 七月二十二日(月)中でお願ひ致します。

【青葉会報】

一、 今回は、世田谷区施設の会議室「しゃれなあと」が移転して初めての句会でした。猛暑の中、初めての場所に集うというのは、些か不安がつきまとうものです。それでも何とか概ね無事に集合することができ新しいビルの部屋での句会となりました。結果はご覧の通りで、びんさんが十点、亜也さん、康敏さんのお二方が九点、となりました。今回も四点句が大変多く、皆さまの選句のご苦労もあつたかに見えます。これも佳きこと、と感じますが如何でしょうか。

孤舟選者近詠

穴空きのジーンズを穿く暑さかな
花の名を教はり教へ風薫る
新緑やフイトンチッドのドッグラン
風と来て水を掠むる揚羽蝶
蛇の衣少女も脱皮する気配

関係者近詠

性別の記入任意と芽吹き初む
抗癌剤といざいざ勝負山笑ふ
背丈越す母を守るかに卒業す
衣食住足りつも妬心シクラメン
三段に鉄棒錆びていぬふぐり
潮騒のいつか忘れて桜貝
小董に草田男の句碑囲まれて
花冷えや賽銭箱に硬き音
叱られた父とのベンチ朝桜
じれったき天道虫の遠回り
ぼわぼわと産毛芽吹きの落羽松

真希子 山葵田をひたす清流天城超え 陽亮
全 ペンだこも訛も失せて啄木忌 ※ 全
全 隅堤の花に嬌声人力車 全
全 飛花落花芳はり合うて五十年 全
弘子 生きてゐる限りあの歌半仙戯 全
全 くちびるのさみしき夜や花万朶 全
全 名画座に故人集へり竹の秋 全
全 ※の句「ペンだこ」は「たこ」が漢字です
全 が、この不具合か変換できず読みのみ
全 ま表記しました。お詫び致します。

令和六年七月十一日

森の座 横澤放川 選 (日経俳壇選者)

(了)

